

マーラー 《ガイド》



グスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860年7/7 - 1911年5/18)

オーストリアの作曲家であり指揮者です。19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍し、ロマン派音楽を発展させ、後の表現主義音楽や新ウィーン楽派に影響を与えました。

1.生涯

幼少期と青年期

マーラーは現在のチェコ（オーストリア帝国）のカリシュトでユダヤ系ドイツ人の家庭に生まれました。幼少期から音楽の才能を示し、ウィーン音楽院で学びました。

指揮者としての活躍

マーラーは指揮者としても非常に高く評価されていました。以下のような主要な歌劇場で活躍しました：

- カッセル劇場（ドイツ）でキャリアをスタート
- プラハ国立劇場、ライプツィヒ歌劇場を経て、
- ブダペスト歌劇場（1888年 - 1891年）で成功を収める
- ハンブルク歌劇場（1891年 - 1897年）
- ウィーン国立歌劇場（1897年 - 1907年）：カトリックに改宗し、ウィーン宮廷歌劇場の音楽監督就任
- ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場（1908年 - 1910年）、ニューヨーク・フィルハーモニック（1910年 - 1911年）でも活動

晩年と死

マーラーは社会的不遇や愛娘との死別を経て自身も健康を害し、1911年に細菌性心内膜炎によりウィーンで他界しました。彼の死後、作品は一時期忘れられましたが、20世紀半ばに再評価され、現在ではクラシック音楽の重要な作曲家の一人と見なされています。

2. 作曲家としての特徴

マーラーの音楽は、感情の振れ幅が大きく、世界観の規模が大きいことで知られています。また、彼の作品にはしばしば哲学的なテーマやユダヤ的な要素が含まれています。

交響曲

マーラーは9つのシンフォニーを完成させ、未完の「第10番」を残しました。彼のこだわりは従来の形式を拡張し、オーケストレーションの多様性を極限まで追求しています。

- 交響曲第1番「巨人」（1888年）：劇的な構成と民族的な要素が特徴
- 交響曲第2番「復活」（1894年）：次々と合唱を繰り返す、生と死、復活をテーマにした作品
- 交響曲第3番（1896年）：生きながらえの苦しみで、自然と宇宙の視点を描く
- 交響曲第5番（1902年）：有名な「アダージェット」が含まれており、愛と死のテーマが出る
- 交響曲第6番「悲劇的」（1904年）：悲劇的な運命を象徴する「ハンマー一撃」が有名
- 交響曲第8番「千人の交響曲」（1910年）：大規模な合唱とオーケストラを用いた荘厳な作品
- 交響曲第9番（1910年）：死を目前にした心情が反映される感動的な作品
- 交響曲第10番（未完、1911年）：死後に補完された未完の作品

声楽作品

- 「亡き子をしのぶ歌」（1904年）：子供の死をテーマにした感動的な歌曲
- 「リュッケルトの詩による5つの歌曲」（1901年）：内省的で抒情的な作品
- 「大地の歌」（1908年 - 1909年）：中国詩を選んで交響した歌曲

3. マーラーの影響と評価

マーラーは生前、指揮者としては高く評価されていましたが、作曲家としての評価は賛否が分かれていました。

マーラーの音楽の影響

- 新ウィーン楽派（シェーンベルク、ベルク、ウェーベルン）：マーラーの交響的な手法を受け継ぎ、無調音楽や表現主義へと発展
- 映画音楽：マーラーのドラマチックなオーケストレーションは、映画音楽の作曲家（ジョン・ウィリアムズやハンス・ジマーなど）にも影響を与えた
- 20世紀の作曲家（ショスタコーヴィチ、プリテンなど）：マーラーの形式や主題的な展開を継承

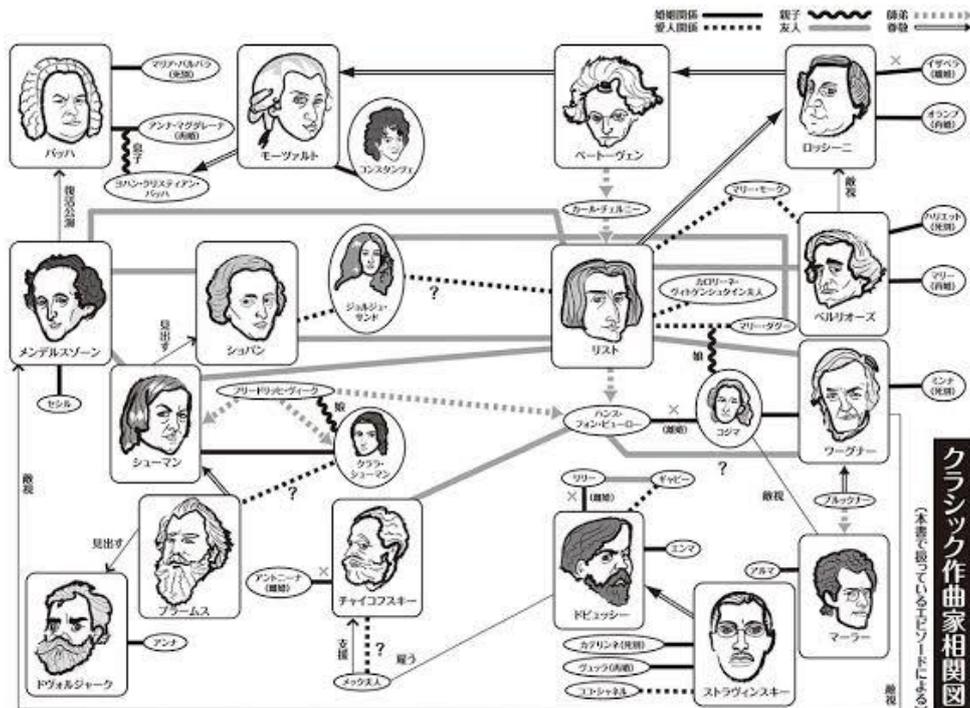
4. マーラーの名言

マーラーは哲学的で詩的な発言を多く残しています。例：

- 「交響曲は世界を包含しなければならない」（彼の音楽観を象徴する言葉）
- 「伝統とは灰を崇拜することではない、火を灯し続けることだ」（音楽の進化についての考え）

5. まとめ

マーラーは交響曲・歌曲問わず、深い人間性や哲学的なテーマを表現し、ロマン派音楽を20世紀へと橋渡しした重要な作曲家です。彼の音楽は壮大でありながらも繊細で、現代においても多くの人々を捉え続けています。



マーラー作品における、哲学・宗教的特徴

グスタフ・マーラーの音楽には、哲学的・宗教的なテーマが深く根付いています。彼の作品は純粋な音楽表現に留まらず、「生と死」「神と人間」「苦悩と救済」といった一般的な問いを投げかけています。

1. マーラーの哲学的背景

マーラーは、19世紀末のウィーンにおいて知られた潮流に影響を受けました。

(1) ショーペンハウアーとペシミズム

- マーラーは、アルトゥール・ショーペンハウアーの哲学、特に『意志と表象としての世界』の影響を受けました。
- ショーペンハウアーは、人生を「心に満ちたもの」と捉え、その制御方法として「芸術」と「禁欲」を志向しました。
- マーラーの作品には、絶え間なく苦悩と救済の対立が描かれています（例：交響曲第6番「悲劇的」）。

(2) ニーチェの影響

- フリードリヒ・ニーチェの考えもマーラーに影響を与えました。
- 特に「神の死」や「運命の克服」といった概念がマーラーの音楽に現れています。
- 交響曲第3番の第4楽章では、ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』からの詩が用いられ、「真夜中の歌」として人生の意味を問いかけます。

(3) ロマン派の精神

- マーラーはロマン主義(合理的な造形よりも感情や主観を前面に出す)の作曲家であり、ワーグナーやブルックナーの精神を受け継いでいます。
 - 更にマーラーの音楽には、内面的な葛藤と宇宙的な範囲を同時に表現しようとする試みが見られます。
-

2. マーラーの宗教観と音楽

マーラーはユダヤ人として生まれましたが、カトリックに改宗しました。しかし、彼の音楽には一つの宗教に縛られず、大衆的な霊性が宿っています。

(1) 「生と死」の問題

マーラーの音楽はしばしば「死の問題」に決着します。彼の作品では、死を悲劇として描くだけでなく、それを乗り越えようとする試みも見られます。

- **交響曲第2番「復活」**：「死後の世界」をテーマに、最終メロディでは荘厳な合唱で【復活】を高らかに歌います。マーラーは「死は終わりではなく、存在の始まりだ」という考えを音楽で表現しています。
- 「亡き子をしのぶ歌」：マーラー自身の子供の死を予見するような歌で、喪失と慰めが表現されています。

(2) ユダヤ教の要素

- マーラーはユダヤ人として生まれ、彼の音楽にはユダヤ教の「悔い改め」や悲しみが刻まれています。
- **交響曲第1番**の第3楽章で、「フレール・ジャック (Frère Jacques)」の旋律が短調で葬送行進曲風に変奏され、ユダヤ的な哀愁が漂います。

(3) キリスト教的要素

- 彼はウィーン国立歌劇場の指揮者になるためカトリックに改宗しましたが、その音楽はキリスト教の枠を超えた普遍的な精神性を持っています。
- **交響曲第8番「千人の交響曲」**：最終楽章では、ゲーテ（『ファウスト』）の「神の愛による救済」が歌われます。

(4) 仏教・道教・儒教等の東洋思想

- 「大地の歌」：唐詩（李白・孟浩然・王維 等）を基にした作品で、人生の無常や酒による慰めを歌います。山水画を想わせながら鮮やかに表現されています。マーラー自身が「私は仏教徒だ」と語るほど、東洋思想に傾倒していました。
-

3.交響曲の哲学的意味

マーラー音楽の特徴は、人生や宇宙に関する問いかけを多く含んでいます。

(1) 交響曲第9番：死と超越

- この作品はマーラーの遺作の一つであり、死を目前にした彼の心情が反映されています。
- 第4楽章の儚げな終結は、まるで魂が浄化されていくような印象を与えます。
- マーラーはこの作品で「死とは何か？そして、それをどう受け入れるか？」という根本的な挑戦を投げかけています。

(2) 交響曲第5番：マーラー絶頂期の「愛の音楽」

- 第4楽章「アダージェット」は、マーラーが妻アルマへの愛を込めて書かれたと言われております。～映画『ベニスに死す』挿入曲～
- これはマーラーにとって「愛と救済」の象徴であり、ロマン派的な「愛の力による超越」が描かれています。

4.マーラーの音楽の哲学的・宗教的な統一性

マーラーの作品には、次のようなテーマが繰り返し登場します。

1. **生と死**（死の恐怖・死後の世界への希望）
2. **苦悩と救済**（覚悟を経て光を見る）
3. **神と宇宙**（宗教的な問い・自然と一体感）
4. **人間の弱さと〈愛〉**（個人の苦しみと愛の力）

5.まとめ

マーラーの音楽は、哲学的・宗教的な探求の場でもありました。彼の姿勢は、ショーペンハウアーの悲観主義、ニーチェの超人思想、仏教にも通ずる東洋の無常観、キリスト教の救済など、多様な思想を統合しています。マーラーの音楽を聴くことは、美しい旋律を楽しむことと共に、「人生とは何か」「死の先には何かがあるのか」といった深遠な問いに、**全宇宙的観念から向き合う旅**でもあるのです。

マーラー 交響曲第2番「復活」解説

1. 概要

- **正式名称**：交響曲第2番 八短調 「復活」
(Symphonie Nr. 2 c-Moll 「Auferstehung」)
- **作曲年**：1888年-1894年
- **初演**：1895年12月13日(作曲者指揮)
- **演奏時間**：約80~90分
- **編成**：大編成オーケストラ、ソプラノとアルト独唱、合唱 5楽章
- **テーマ**：「死」「復活」「救済」「人間の運命と超越」

この作品は、マーラーの創作の中でも最も劇的な作品の一つであり、彼が生涯にわたって探求した「死と再生」「生の意味」「救済と超越」といった哲学的・宗教的テーマが縦横に織り込まれた作品となっています。発表当時は急進的 or 革新的と評価は分かれまして

2. 作曲の背景

(1) 交響曲第1番「巨人」との関係

- 交響曲第1番「巨人」では、英雄の苦闘と敗北が描かれていましたが、「死を超越する希望」は描かれていませんでした。
- 交響曲第2番では、その続きとして「死の先にあるもの」を探求し、「復活」まで続く物語を描いています。

(2) ハンス・フォン・ビューローの死

- 1894年、指揮者ハンス・フォン・ビューローが死去し、彼の葬儀で詩人フリードリヒ・クロプシュトック (Friedrich Klopstock) の詩「復活 (Auferstehung)」を思い出したのです。
- これがマーラーにとって啓示となり、曲のフィナーレ(第5楽章)の「復活の合唱」の基礎となります。

3. 楽曲構成と解析

この作品は5つの楽章で構成され、それぞれが「死と復活」という一連のテーマを異なる視点から描いています。

第1楽章：葬礼 (Allegro maestoso)

- 調性：ハ短調（ハ短調）
- 形式：ソナタ形式
- 特徴：厳かで劇的な葬送行進曲が主題。
「英雄の死」と「死の問いかけ」が表現される。
クライマックスではオーケストラが爆発するような激しい表現が登場。

→ 「**人生の終焉と運命の問いかけ**」
「ここで英雄が死ぬ、何のために生まれてきたのか？その人生の意味が問われる。」

第2楽章：過去の回想 (Andante moderato)

- 調性：変長調（変イ長調）
- 特徴：メヌエット風の穏やかな音楽で、死者の「幸福な思い出」を表します。
夢のように甘美な旋律が流れるが、時折、不安な影が差します。

→ 「**過去の幸せな記憶と郷愁**」

第3楽章：スケルツォ (In ruhig fließender Bewegung)

- 調性：ハ短調（ハ短調）
- 元になった歌曲：「子供の魔法の角笛」より[魚に説くパドヴァの聖アントニウス]
- 特徴：ユーモアの中にも、限界と絶望に満たされた音楽。
軽快なワルツ風だが、どこか空虚で虚無的な響き。
突然の激しいオーケストラの爆発が混沌を示しているようです。

→ 「**人生の最大さと不安**」
「世界は混沌としており、何も意味を持たないのか？」

第4楽章：「**原光** (Urlicht)」（神の光）

- 調性：変二長調（変二長調）
- 歌詞：『子供の魔法の角笛』より
- 歌詞出典：マーラー自身が編曲した民謡集『子供の魔法の角笛（Des Knaben Wunderhorn）』
- 特徴：アルト単独唱が、まるで祈るように「神のもとへ帰る道」を歌います。
シンプルなメロディが、「魂の救済」への憧れを象徴します。

→ 「**神のもとへ帰還する道がわかる**」

「おお神よ、私はあなたのもとへ行きたい。」

この楽章は、前楽章の不安定なスケルツォ（第3楽章）から、静謐で内省的な雰囲気に移行します。アルト単独唱が、穏やかで敬虔なメロディーと共に「神のもとへの帰還」を歌い、初めて「救済の可能性」＝《光》が示されます。

この楽章はマーラーにとって「死の先にある希望」を象徴しており、最終楽章の「**復活**」今後に繋がる重要な転換点となっております。

《日本語訳》歌詞

おお、赤い薔薇よ！

人間は極限の苦しみの中にいる！

人間は計り知れない苦痛の中にいる！

私はむしろ天国にいたい。

私は広い道へと歩み出した。

そこに天使がやってきて、私を追い返そうとした。

ああ、いやだ！私は退くわけにはいかない！

私は神から生まれ、再び神のもとへ戻るのだ！

慈悲深き神は私に小さな光を与え、

それは私を永遠の至福の世界へと導いてくれるだろう！

《解釈》 この詩は、魂の嘆きと救済への願望を表現しています。

1. 「**おお、赤い薔薇よ！**」
 - 「赤い薔薇」は、キリスト教的には「愛」や「救済の象徴」とされる。
 - また、仏教的に「赤い花」は「瞬間の象徴」とも捉えられます。
2. 「**人間は極限の意志の中にある**」
 - 世界の存在は「表象」（自分のシアター）であるというショーペンハウアー的な考えが反映されている。
3. 「**天使が私を拒否する**」
 - これは、「魂が浄化される前は天国へ行けない」ことを示唆している。
4. 「**私は神のもとへ戻るのだ！**」
 - 仏教的な「輪廻転生」や「悟り（涅槃）」の概念にも通じる。
 - キリスト教的には「神の国（天国）への帰還」を意味する。
5. 「**神は私に光を与えてくれる**」
 - ここでの「光」は「原光（Urlicht）」であり、「悟り」や「魂の救済」を象徴している。

● 第5楽章：「復活」（Auferstehung）

- 調性：ハ長調（ハ長調）
- 形式：合唱付きフィナーレ
- 歌詞の出典：フリードリヒ・クlopシュトック（Friedrich Klopstock）の詩「復活（Auferstehung）」及び、マーラー自身による追加の詩
- 特徴：「最後の審判」のような緊張が極限的な展開。
トロンボーンファンファーレが**死者の目覚めを告げる**。
合唱「復活せよ！」（Aufersteh'n!）が感動的なクライマックスを形成
オーケストラと合唱が壮麗に広がり、「**死を乗り越える光**」を表現する。

→ 「**魂が神のもとに復活する**」

この楽章は伸びやかなオーケストラと合唱を伴い、「最後の審判」や「復活」のドラマを音楽的に描写します。「Ja, aufersteh'n wirst du!」（復活せよ！そう、あなたは復活する!）という合唱は、マーラーの音楽の中でも最も感動的な瞬間の一つです。

《日本語訳》 歌詞

よみがえる、そうだ、おまえはよみがえるだろう、
私の塵よ、短い憩いの後で。
おまえを呼ばれた方が、不死の命を与えてくださるだろう。
おまえは種蒔かれ、ふたたび花咲く。
刈り入れの主は歩き、我ら死せる者らの藁束を拾い集める。

おお、信じるのだ、わが心よ、信じるのだ、何ものもおまえから失われはしない！
おまえが憧れたものはおまえのものだ、おまえが愛したものの、争ったものはおまえのもの

おお、信じよ、おまえは空しく生まれたのではない！
空しく生き、苦しんだのではない！

生まれ出たものは、必ず滅びる。滅びたものは、必ずよみがえる！
震えおののくのをやめよ！生きることには備えるがよい！

おお、あらゆるものに浸み渡る苦痛よ、私はおまえから身を離れた！
おお、あらゆるものを征服する死よ、いまやおまえは征服された！
私が勝ち取った翼で、愛への熱い欲求のうちに私は飛び去っていこう、
かつていかなる目も達したことのない光へと向かって！

私が勝ち取った翼で、私は飛び去っていこう！
私は生きるために、死のう！
よみがえる、そうだ、おまえはよみがえるだろう、わが心よ、ただちに！
おまえが鼓動してきたものが

永遠の神の光のもとへと、おまえを運んでいこう！

《解釈》

1. 「復活せよ！」

キリスト教的な「最後の審判」と「復活」のイメージが表れる。

マーラーは「すべての魂が救済される」という普遍的な復活を描く。

2. 「信じよ！何も恐れるな！」

ここでは、輪廻転生や霊的な再生の考え方とも共鳴しています。

3. 「私は神のもとへ戻る」

「原光」と同じテーマ、マーラーが生涯探索した「魂の帰還」の象徴。

4. 哲学的・宗教的解釈

(1) キリスト教的視点

- ・「復活」というテーマは、キリスト教の「最後の審判、イエスの復活」と関連。
- ・マーラーは正統的なキリスト教信仰を超えた「人間の魂の普遍的な救済」を描いた。

(2) ショーペンハウアーの世界観

- ・「芸術によって意志は解放され、心の救済を可能とする」という考えと共鳴。
- ・第3楽章で世界の混沌を描き、第4楽章で「原光（Urlicht）」という救済の光が示されるのです。

(3) 東洋思想

- ・「原光」は仏教的な「悟り」「涅槃（涅槃）」に近い概念です。
 - ・「魂が悠久なる時流の中で再生する」という考え方は、輪廻転生や無常観と共通。
-

5. まとめ

交響曲第2番「復活」のストーリー

- 第1楽章：「英雄が死ぬ、人生の意味が問われる」
- 第2楽章：「過去の幸福な記憶」
- 第3楽章：「混沌とする世界に意味を求めて」
- 第4楽章：「救済への希望が見える」
- 第5楽章：「魂が復活し、神のもとへと続く」

【マーラーのメッセージ】

マーラーは、「**死は終わりではなく、新たな存在への移行である**」というメッセージを伝えました。彼は人生の苦悩と絶望を描きながら、最後には「復活」という最大限の希望で昇華させました。特に「復活の合唱」は、音楽史上最も感動的な瞬間の一つであり、「**人間の魂の救済**」と「**永遠の光への憧れ**」を象徴しています。

マーラーはこの作品によって、「**死の恐怖を超え、魂が復活する可能性**」を示し、限りないスケールで「**運命の意味**」を探求したといえるかもしれません。

その核心には、キリスト教的な「復活の概念」と、東洋思想的な「魂の浄化と輪廻」が融合した、「**死の不安**」から「**魂の救済と復活**」までも続く長い旅が描かれています。

日本フィルハーモニー交響楽団

1956年創立。1985年からは自主運営の財団法人となり、「市民とともに歩むオーケストラ」、「人・音楽・自然」をテーマとして、東京都を中心に年間約160回の公演を行っている。2006年に創立50周年を迎えた。

指揮者・コンサートマスター

- 創立指揮者：[渡邊暁雄](#)
- 首席指揮者：[カーチュン・ウォン](#)
- 桂冠名誉指揮者：[小林研一郎](#)
- 桂冠指揮者兼芸術顧問：[アレクサンドル・ラザレフ](#)
- フレンド・オブ・JPO（芸術顧問）：[広上淳一](#)
- 客員首席指揮者：[ネーメ・ヤルヴィ](#)
- 名誉指揮者：[ジェームズ・ロッホラン](#)、[ルカーチ・エルヴィン](#)
- ソロ・コンサートマスター：[扇谷泰朋](#)、[木野雅之](#)、[田野倉雅秋](#)
- アシスタント・コンサートマスター：[千葉清加](#)

歴代常任指揮者

- [渡邊暁雄](#)
常任指揮者、音楽監督、創立指揮者として密接に関わっている。
- [小澤征爾](#)
芸術顧問兼首席指揮者として活動時に財団解散に遭遇し、阻止のため昭和天皇への直訴などを行った。財団解散後、財界支援により団員の3分の1を率いて[新日本フィルハーモニー交響楽団](#)を創設し分離独立する。

- 小林研一郎

首席指揮者、常任指揮者、首席客演指揮者、音楽監督として密接な関わりを持ち、渡邊暁雄亡き後の精神的な支柱で、2010年4月から桂冠指揮者である。

- アレクサンドル・ラザレフ

2008年9月より首席指揮者であり、就任1期目の3年間は年2回のペースで東京定期演奏会に出演して[プロコフィエフ](#)の全交響曲を演奏した。2011年9月から2016年8月までの5年間任期延長された。2期目は東京定期演奏会で「ラザレフが刻むロシアの魂」と題したロシアの作曲家を特集するプログラムを組んでおり、Season I [ラフマニノフ](#) (2011年 - 2013年)、Season II [スクリャービン](#) (2013年 - 2014年)、Season III [ショスタコーヴィチ](#) (2014年 - 2016年)を取り上げた。2016年9月から桂冠指揮者兼芸術顧問となり、引き続き東京定期演奏会で「ラザレフが刻むロシアの魂」シリーズを継続する。2016年秋からはSeason IV [グラズノフ](#)を取り上げた。

- ピエタリ・インキネン

2016年9月から2023年8月まで首席指揮者を務めた。日本フィルとは2008年4月の横浜定期演奏会への初登場以来良好な関係を築き、2010年からのマーラー連続上演、2013年春のシベリウス交響曲全曲演奏、同年9月東京定期での『[ワルキューレ](#)』第1幕上演など、意欲的なプログラムで成功を重ねてきた。就任初年度の2016年-17年シーズンでは、就任披露演奏会でオペラ抜粋、2017年5月東京定期では『[ラインの黄金](#)』を取り上げるなど、ワーグナー作品を引き続き取り上げるほか、2017年春には、ブラームス・チクルスとして、3公演に渡って交響曲全曲が演奏された。

- カーチュン・ウォン

2021年3月、日本フィルを初めて指揮し、2021年8月、同楽団の首席客演指揮者に、2023年9月、首席指揮者に就任した。得意とするマーラーの交響曲（2021年に同楽団との[マーラー：交響曲第5番](#)のライブCDをリリース）のほか、日本人作曲家による楽曲の演奏にも力を入れており、これまでに、[伊福部昭](#)、[芥川也寸志](#)、[武満徹](#)、[小山清茂](#)、[外山雄三](#)、[坂本龍一](#)などの作品を取り上げている。

カーチュン・ウォン

(英語: KahChun Wong、中国語: 黃佳俊、[1986年6月24日](#) -) は、[シンガポール](#)出身の指揮者で、[日本フィルハーモニー交響楽団](#)および[ハレ管弦楽団](#)の首席指揮者。

[1986年](#)にシンガポールで、軍隊で働く父と保育園で先生をしていた母の間に生まれた。

小学校時代に、学校の吹奏楽部に入り[コルネット](#)を演奏し、中学校時代からは[トランペット](#)を演奏した。高校はシンガポール名門校の[ラッフルズ・インスティテューション](#)に入学し、[シンフォニック・バンド](#)に入った。17歳のときに、シンガポール国立のユース・オーケストラに参加する機会を得て、[オーケストラ](#)の団員としての経験を積んだ。

兵役中に[軍楽隊](#)で演奏したが、トランペットの吹きすぎのため唇に損傷を負った。治療中に作曲を始め、それを演奏するためのグループを結成した。この時点で彼はプロの指揮者になる志を考え始めていたという。

2010年、シンガポール人とアジア人の作曲家に焦点を当てた「[アジアン・コンテンポラリー・アンサンブル](#)」を結成した。2011年、[リー・クアンユー](#)奨学金を受け、[ベルリン](#)の[ハンス・アイスラー音楽大学](#)でオペラとオーケストラの指揮を学び、2014年に修士号を取得した。

2011年10月に、[クロアチア](#)の[ザグレブ](#)で行われた[マタチッチ](#)国際指揮者コンクールで2位を獲得したのち、[ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団](#)を指揮していた[クルト・マズア](#)の知遇を得、2012年から2014年の間に、[ライプツィヒ](#)をはじめとするドイツ各地や日本で開催されマズアの[マスタークラス](#)に参加した。ライプツィヒのマズアの家を訪問しスコアを共に勉強したこともあり、[ベートーヴェン](#)、[メンデルスゾーン](#)、[ブラームス](#)、[ブルックナー](#)の交響曲や、[ムソルグスキー](#)の《[展覧会の絵](#)》などのレパートリーの教えを受ける等、深く薫陶を受けた。

2015年3月、母国の[シンガポール交響楽団](#)とプロ指揮者としてデビューを飾った。

2016年、[グスタフ・マーラー](#)国際指揮者コンクールでアジア人として初優勝し注目を集めた。それをきっかけに、グスタフ・マーラーの孫娘であるマリーナ・マーラーと共に、子どもたちへの音楽支援を目的とした非営利団体「[プロジェクト・インフィニチュード](#)」を共同設立。2020年の[新型コロナウイルス感染症](#)流行の折には、1000人以上の世界各地のミュージシャンと共に[ベートーヴェン](#)の「[喜びの歌](#)」のデジタル[シングアロング](#)を行い約200万ドルの寄付を集めた。

2018年9月、[ニュルンベルク交響楽団](#)の首席指揮者となり、初めて常任の指揮者となった（2022年8月まで）。

2019年2月、[ニューヨーク・フィルハーモニック](#)の毎年恒例の[旧正月ガラコンサート](#)を指揮した。2019年12月、[ドイツ連邦大統領](#)から、シンガポールとドイツの文化交流並びにドイツ音楽文化の海外普及における献身的な取り組みと顕著な功績により、シンガポール出身の芸術家として初めて功労勲章を与えられた。

2021年及び2022年にドイツの名門楽団、[ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団](#)を指揮し、2023年9月より同楽団の首席客演指揮者に就任した。

2021年3月、[日本フィルハーモニー交響楽団](#)を初めて指揮し、2021年8月、同楽団の首席客演指揮者に、2023年9月、首席指揮者に就任した。同楽団とは、得意とする[マーラー](#)の交響曲のほか、日本人作曲家による楽曲の演奏にも力を入れており、これまでに、[伊福部昭](#)、[芥川也寸志](#)、[武満徹](#)、[小山清茂](#)、[外山雄三](#)、[坂本龍一](#)などの作品を取り上げている。

2022年3月には、[東京フィルハーモニー](#)と[東京オペラシティ](#) コンサートホール：タケミツメモリアルにて、「武満徹《弧》 [アーク] 」というテーマで、プログラム全てが武満作品の演奏会を行った。

2023年2月、英国[マンチェスター](#)に本拠を置くハレ管弦楽団を指揮し、2024年9月より同楽団の首席指揮者、およびアーティスティック・アドバイザーに就任することが発表された。

これまでに、日本各地のオーケストラのほかに、上述以外の海外オーケストラとして、[ロサンゼルス・フィルハーモニック](#)、[BBC 交響楽団](#)、[ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団](#)、[クリーヴランド管弦楽団](#)、[チェコ・フィルハーモニー管弦楽団](#)、[ハンブルク交響楽団](#)、[デトロイト交響楽団](#)、[シアトル交響楽団](#)、[トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団](#)、[イル・ド・フランス国立管弦楽団](#)、[バレンシア管弦楽団](#)などを指揮している

